# ゴリガン 新たなる遭遇

デウムデウム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゴリガン　新たなる遭遇

【Ｎコード】
Ｎ９８０４Ｄ

【作者名】
デウムデウム

【あらすじ】
かつての銀河大戦の英雄であるゴーリキは、地球で暮らしていた。
そんなとき、マホロバ藩の王女がそのもとへ助けを求めに来た。

# 未知と遭遇（その1）（前書き）

「…あれだけやって、なんで一番湯のカナタじゃないんだ？」

## 未知と遭遇（その１）

銀河系が大銀河神聖将軍家に統一され五千年…
太陽系を含める１５０光年の空間を治めるマホロバ藩は、悪家老によるクーデターにより、存続の危機に直面していた。
マホロバ藩星第７２６王女であるサオリ・マホロバは、かつての大戦の英雄であるゴーリキの暮らす発展途上の惑星に亡命を求めることとなる…
家老の機械兵による追跡に合うも、その惑星の原住民である天野勝也とゴーリキの活躍によりうまくそれを撃退した…

「聞くが、フィンクよ。サオリ様は姫とはいえ、マホロバ王の７２６番目の娘…それに対してあの火器…とういうことじゃ？」
「さすが、ゴーリキ男爵…察しが早い…家老のやつ、他の藩に武器を密売しているようで、あれくらいの武器の改良は簡単に…それにもう一つ、家老には姫を消さねばならぬ理由が…」
「…む！待て、勝也だ！」
「じ……ゃん！じーちゃん！」
「おお、勝也。よく来たな。どうした？何かあったか？」
「いや、今日、サオリが学校に来なかったから。」
「そことなら、登校前に体調が悪いと説明したじゃろうが。」
「だから、お見舞いに。」
「いい。お前にうつったらどうする。今日は帰れ。」
「でも…」
「いいから、帰れと言うとろうが！」
「わ…わかったよ！」
「…あの小僧を引き離すおつもりですか？」

「元より勝也は無関係な人間…危なくない程度ならば、修行にもなったのじゃろうが、この時代のこの星に、それほどの危険を侵してまで強くなる必要もない。」
「…大事な友人なのですね。」

## 未知と遭遇（その2）（前書き）

「いやでも、美神終了直後となると、一番湯のカナタまで構想広がらないカナ。それに、アシやって裏事情知ったとしても、あの作品をこれ以上触れるのは怖いカナ。」

## 未知と遭遇（その2）

「…ゴ…ゴーリキ男爵！」
「なんじゃ？騒がしい。」
「それが…宇宙船から通信が入りまして…」
「何！？地球に別の宇宙船が浮かぶのを見つけただと？」
「はい…」
「で、マホロバ藩の船なのか？」
「いえ、そこまではわかりませぬが、ここはマホロバ藩内なのでおそらくは…」
「そうか…一応、調査を進めておいてくれ。」

「ゴリガンのやつ、何もあんな言い方しなくても…」
「天野勝也くんだね…君の知人の剛力という老人について聞きたいのだが、ちょっと来てもらえるかな？」
「！…あんた、何者だ？」
「フッ…教えてやろう。ゴーリキの正体は知っているのだろう？実は、私も宇宙人でね。君には、ゴーリキを倒すために、協力してもらいたいんだ。なに、協力と言っても簡単なことをしてもらえば済む。…って、いない！？」

「じーちゃん！じーちゃん！」
「どうした、勝也？姫はまだ体調が優れぬのでな、見舞いならまた今度な…」
「怪しいやつが、じーちゃんのことを探してた。」

「なんじゃと！？」
「初対面で怪しいとはひどいな…」
「な！？付けて来てたのか？」
「お…お前は…」
「ほう…覚えていたか…」
「いえ…えーっと…」
「ふっ…忘れたなどのお約束をしおって…ならば、名乗ってやろう。」
「いや、待て。もー少しで出てきそうなんじゃ…こういうのは自分で思い出した方がいい。…こういうのが脳の老化につながっていくのでな。」
「ふっ…そう言って、名乗らせないというオチか…私の名は…」
「まだ待てと言うとろうが！うーむ…やってもないし、あいつでもない…大分昔のことだからな…」
「じーちゃん…」
「どうした？」
「さっきのじーちゃんの待ったで、そいつ気絶しちゃったみたいだけど？」

## 未知と遭遇（その3）（前書き）

「まあ、確かに、カナタは詰込みすぎたところあるし、あの状態から再開しても誰も着いてこないだろうが…お前はそれでいいのか？」

## 未知と遭遇（その3）

「敵を中に入れるなどどういうつもりなのですか？」
「いや、やつは敵ではない…やつは…」
「そんなことより、どーいうことだよ！サオリ、元気じゃんか！」
「サオリ様だろうが！この犬が！」
「…フィンク、おやめなさい。私が勝也くんにそう呼ぶように頼んだのです。私も勝也くんと呼ばせいただいているのですから…」
「ほう。交換条件か、犬のくせにいい身分だな。」
「うう、まだ言うか文鳥のくせに…じーちゃん、なんで嘘付いたんだよ！」
「この犬が…お前に上下というものを教えてやろう。」
「フィンク、やめなさい！…勝也くんも男爵さまをせめないでください。男爵さまは勝也くんを危険から遠ざけるために…」
「！…オレを守るために！？…なんでだよ？…姫と友達になったのなら、お前も男として命をかけて姫を守れって言ったのじーちゃんじゃんか！なんでなんだよ！」
「勝也…」
「うるさい！じーちゃんなんか！じーちゃんなんか！！」
「黙れ、クソガキ！」
「なんだと、文鳥！」
「ゴーリキ男爵の気持ちがわからんのか！大切な人間だからこそ、巻き込みたくなかったのだろう。」
「勝也、お前はワシの友人じゃ…じゃから、ワシを信じて、この星で待っておれ。」
「なんで…だよ…」
　ゴーリキの手刀により、勝也は気を失った。

「ほんとによいのですかな？」
「ああ。この星にいれば、勝也を巻き込むことになる。姫…すみませんな…」
「いえ…元はといえば、私たちが持ち込んだ問題。全てを終わらせ、また、この星に戻ってきましょう。」
「また、その選択を取るのか？」
「ソームライか…」
「思い出したか？」
「何故、ここにいる？…何をしに来た？」

# 未知と遭遇（その４）（前書き）

「カナタは、満足してないカナ。ゴリガンはしょせん、プロット。チルドレンでいうとこの読み切り版カナ。ちなみに、カナタは、読み切り版の普通の人々の方が好きカナ。…ゴリガンはすぐに終わるカナ。家老に居場所バレてるし、地球に留まる理由もないカナ。ゴリガンが終わったそのときこそ、カナタの時代カナ。」

## 未知と遭遇（その４）

「…因縁が追い付いてきたとでもお思いください。その少年、かつての私と同じ思いをその少年にもさせるつもりですか？」
「…」
「かつて、私は、あの大戦を置いていかれた。…騎士団が壊滅するほどの大戦、その恐ろしさはわかります。しかし、幼かったとはいえ、その思いは…」
「…」
「事実、私は、あなたを倒すために旅をした。その少年にあなたの弱点を探らせようともしたくらいです。」
「残された者の思いなど考えようとしていない。だいいち、その旅立ちの台詞、死亡プラグが立ちすぎている。」
「…ならば、ワシを止めてみろ。」
「懐かしいですね、その言葉…」

「…強くはなったが、まだワシには敵わん…」
「…しかし、あなたは、地球を出れない。」
「む！？」
「じーちゃん！じーちゃん！！」
「勝也、気が付いたのか？…これを待っていたのか？」
「できれば、勝ちたかったんですが…」
「いや、ワシの負けじゃ。二度も勝也を気絶させれん…」
「それに、その少年をそこに残していってもあなたの関係者というのは変わりませんよ。いつ、人質に取られてもおかしくない。」
「しかたないの…明日から修行じゃ…」

「じいちゃん…」

「フウ…」
「何故、あんなにも焦っていたのです？」
「…勝也も帰ったから教えるとするか…姫はこの状況を一変させかねん存在なのじゃ。」
「…どういうことです？」
「家老は姫とその秘密を知る者全てを消しにくる。」
「何故です？」

# 未知と遭遇（その5）（前書き）

「…そこまで考えていたのか。っていうか、顔が家康化してるぞ。…でも、やっぱ、カナタをそのままやるのは、マズイんじゃねーか？」

「実は、姫はな、大将軍家の血筋を持っているのじゃ。あのかつての対戦の中、大将軍家の人間の一部は、同盟の目的のために他の勢力に嫁いだんじゃ。」
「その中の一人が姫の祖先？しかし…」
「うむ。そんな人間は、この宇宙では他にもいるじゃろうし、寿命の長いワシら以外にとっては、そんな5千年もの昔のことなど重要視せんじゃろう。」
「ならば、何故？」
「家老は、その事を知っておった…おそらく家老は、かつての大戦で滅んだナ・リタの血筋の者…その目的は藩一つの支配ではなく、大将軍家への復讐。」
「…」
「この宇宙が大将軍家の統治下にあるとはいえ、それは、かつての大戦で大将軍家を神格化しているからこその平和でもある。薄い血とはいえ、その血を持つ者が殺されたとなれば、統治は崩れ、各地で戦争が起きる。…そして、それを避け、藩の統治惑星に呼びかけることができれば…」
「大将軍家の血を引く姫のもと、兵は立ち上がり、家老の野望は阻止できるというわけですか？…なるほど。確かに、この星にとどまるべきではなさそうですね。ですが、それならばこそ、あの少年や私を連れて行ってもらいましょう。」
「いいのか？」
「私の心残りは、あの大戦で力になれなかったこと…あなたに私の力を認めさせることが私の目的ですから。」
「…すまないな。」
「それにあなたが置いて行こうとしたあの少年、強くなりますよ。」
「何故、そう思う？」

「あの少年は、守るべきもの・戦うべき場所を知っている。それに、漫画の主人公ってああいうタイプでしょう？主人公になりそこねた私が言うのもなんですが。」

**ＰＤＦ小説ネット発足にあたって**

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9804d/

ゴリガン 新たなる遭遇

2010年10月9日20時11分発行